

## 佐伯貞中の和歌

白方 勝

明和・安永頃東予歌壇において活躍した佐伯貞中については、その人と事蹟を知る十分な資料が残されていない。星加宗一氏は『周桑歌人集』中の詞書から「彩牛庵・雨律・逸翁」が貞中であるとされたが（周桑歌人集附雨律について・周桑史談第三号）、これによって歌人貞中は俳人雨律でもあったことが明らかになった。僅かではあるが、管見に入った資料を列挙してみよう。

- ① 『百歌仙合』（寛延四年）合田由良雄撰に出句。
- ② 『四国紀行』（宝暦三年）夕静編に入集。
- ③ 『巖島歌仙合』（同七年）の願主となる。
- ④ 『月声集』（同九年）牧雨編に入集。
- ⑤ 『花の下ふし』（天明元年）小松藩士渡辺忠とともに、帰京する歌の宗匠森河高尹に従い、吉野の花を見、奈良・京都と巡って帰る。
- ⑥ 『柿本明神法楽詠五十首』（安永三年）石岡八幡宮で行われた人麿影供に参加、三首を詠む（本誌第十七巻参照）。
- ⑦ 『周桑歌人集』（享和三年）山月翁貞中は八十の賀を催し、多くの歌人俳人より賀の歌俳を贈られる。
- ⑧ 文化元年歿。墓碑に「寿嶺南巖居士佐伯貞中享和三年六月二十九日没」とある。他に

「佐伯金吾惟燈」とあるともいう（前掲星加氏論文）。今墓は不明である。

⑨ 「ひなのてぶり」（嘉永七年）半井梧庵編。三首入集。歌人名録に「貞中 吉田村 佐伯金吾」とある。

⑩ 『山月集』（文政三年筆写本）貞中の歌集。「山月集は冷泉御門下小松吉田村佐伯貞中之家集也」と筆写者鴨重忠の識語がある。

以上を総合してみると、貞中は享保九年（一七二四）に生まれ、幼名は不明であるが、通称を金吾と名のり、惟燈は正式の名であったと思われる。若くから雨律という俳号で俳諧に親しみ、中年以降は貞中、または山月翁と名のって和歌に親しみ、冷泉為村門人であった。当時東予地方は和歌も盛んであって、石岡八幡宮玉井忠成、周円法師、渡辺忠、実報寺宥上人、土居の庄屋加地信之らの為村門人がいた。貞中もこれらの人との交りがあったので、冷泉門に入ったのかもしれない。また新玉津嶋神社の森河高尹にも師事したようで、高尹を招いて歌の指導を受けたものと思われる。高尹の名は『花の下ふし』のほか、石岡八幡宮蔵の『詠百首和歌』にも見える。

俳諧和歌にこれだけ精進できたのは、貞中がかなり富裕な人であった

からであろう。丹原町大頭の庄屋佐伯氏から分かれて、吉田村では酒屋であったという。八十の賀にこれだけの人々を集めるのは、その人徳だけでなく、その資力もあつてのことであろう。しかしその翌年に貞中は歿している、この賀は貞中にとって最後の輝きであつたと思われる。今その子孫は吉田（現東予市）には残っておらず、その和歌もすべて散逸したものと思われていたが、⑤⑩の二本が小松高鴨神社主鴨重忠によつて筆写されていた。貞中の和歌は殆ど紹介されていないので、今回はこれ⑦を加えて、貞中の和歌を紹介する。

『山月集』

高鴨神社蔵

半紙本一冊。春三八、夏二八、秋三五、冬一七、恋二〇、雜四〇、計一七八首を収める。八十歳と詠んだ歌が含まれているので、あるいは貞中歿後に関係者によつて編集されたのかもしれない。後に『ひなにてぶり』に採られた三首も本集に含まれているが、⑥の三首は含まれていない。貞中の和歌がほぼまとめられている唯一の資料である。

『花の下ふし』

高鴨神社蔵

横中本一冊。帰京する森河高尹に従つて、渡辺忠、貞中が吉野の花見に出かけた時の紀行歌文。末尾に「天明元丑四月廿八日」とあるのが、帰着の日であろう。標題はこの吉野行を意味する。三人は吉野から大和、奈良、京都に赴いている。京都で渡辺忠が出家して円浄と名のる。都では歌友との交わりも記されている。鴨重忠は渡辺円浄所持本を写している、渡辺円浄の著かと思われるが、高尹、貞中、円浄、三人ともにその立場で歌の詞書を書いているところを見ると、三人の歌とその詞書を紀行文の形に編集するという方法で本書が成立したのかもしれない。本書の中の貞中の歌は『山月集』に含まれていない。渡辺円浄には他に『筑紫紀行』もある。やはり鴨重忠の筆写である。

『周桑歌人集』

伊予史談会蔵

半紙本一冊。標題は後人の命名であろう。貞中八十の賀集である。序文は小松宝寿寺住職見阿、歌は小松藩儒者竹鼻正脩、京の逸齋をはじめ、西条、小松、壬生川の歌人に、近藤篤山の七絶、馬来等の興詠（狂歌）、雨桂、雨貢、いそ春の賀句が三句収められている。貞中をとり巻く歌友の多さとともに、周桑地区の文化の高さには目を見張るばかりである。貞中の歌は、逸齋の歌に返す一首、他二首、計三首のみであるが、周桑歌壇隆盛のさまを示すためにここに全体を翻刻紹介することにした。翻刻を許可された高鴨神社主鴨重元氏、伊予史談会、御教示をいただいた東予市中央公民館に対し、厚く感謝申し上げます。

また本稿は、昭和六十年度文部省科学研究費助成「愛媛の国文資料の研究調査」の一環をなすものである。

山月集

山月集春部

貞中詠舛

立春

一夜明てきのふの遠くなりぬるは春の霞やたちへたつらん

早春山

立かへる春のみとりの海こしに見えてそかすむ紀路の遠山

名所早春

春のたつしるしも見えて箱崎の松風かすむあけほのゝそら

初春松

あさみとり春たつのへの小松原子の日もまたす先とひてまし

初春祝道

春きぬとさくやこの花難波津の道さかへ行しおりならまし

福寿艸に題して

立かへる春のはつくさけふよりそこかね花さく色に匂へる

山家子日

はつ春の初子と聞は山住の軒はの松の風ものとけき

雪消氷又解

やわた山雪消の松の春風に氷流るゝ淀の川つら

野沢始迎春

立かへる春野の小松色そ添ふ沢辺の鶴の声もかすみて

連峰霞

咲出ん花のしるへと霞むなり青根か峰もかねの御嶽も

海上霞

はるの日の光のとかにいつの海や沖の小嶋もけさはかすみて

湖霞

見るめなき海とは誰か詠めけん曙かすむしかのうら山

鶯

朝な夕な木伝ひなれて梅か香に匂ひくらふる鶯の声

花間鶯

盛りなる花より花に移り来てはるをしめたるうくひすの声

梅花告春

ね覚する袖ものとけし梅か香の今朝たつ春をつけの枕に

梅薫簾

霞む夜の月ほもり来ぬ玉たれにへたてす通ふ風の梅かゝ

月前梅

梅の花手折んとすれは袖の上に霞て匂ふはるの夜の月

春竹契久

うくひすの馴くる竹の千よのかけ心のとかにいく春もへん

松含春色

のとけさも日ことにそはん春の色を雪間に見する嶺の松か枝

閏正月雪

さくら花いつより見まし二かへりむ月ふりても雪のちりかふ

浦春月

よなくは浦の春風さへかへり霞もはてぬ波のうへの月

湖上春月

鳩の海や春は塩やくおもかけにうらめつらしく霞むよの月

浦春曙

うきねせし小舟も波にこき出てうら風霞む春の明ほの

牧春駒

まこもおふるみつ野の末を見渡せは霞をいてゝ駒こまいほふ也

春雨夜静

音もなきはるの雨にも夜を残す老のね覚の袖はぬれけり

依花待月

朧なる影をも待てさくら花したふ心を月につくさん

雨後花

ぬるたもとやとりし木陰雨はれて猶一きはの花の夕はへ

花為佳会媒

奥深き花を枝折に分入てあらぬ山路の円居をそする

花下忘婦

暮るとも見えぬさかりの花のかけ誰か家路を思ひいつへき

母の霊前に花を手向るとて

同じ世にありて詠むる花ならばかゝる涙の露はそゝかし

寄花速懐

花咲ぬ身をもかこたし家桜長閑き陰に老をかくして

春鐘

さかりなる花にこもりてかねの音ものとかにかすむ小初瀬の山

桃李不言

ものいわ<sup>つ</sup>咎めやすらん心なく手折る園生の桃の一えた

春雉思子

身にかへて子や思ふらん狩り人のいる野の雉子立もはなれず

牡丹

もろこしに住獣もふかみ艸深き色香につなかれやす

暮春浦

霞さへ今はまかふの海土衣うら淋しくもはるそくれゆく

春動物

さかりなる花に鳴てもわひしきは木伝ふ猿の夕くれの声

春祝言 婚賀

頼もしな千世をこめたる呉竹の子もした患む春の園生は

山月集夏部

首夏藤

ほととぎす尋る山の松か枝に春を残してかゝる藤なみ

待郭公

つれなしと思ひすてゝも時鳥月いてなはと猶そまたるゝ

暁郭公

ほととぎすおのか涙やくらへんと老の寢覚の枕とふらし

水郷早苗

川長の業にも同じさなへ草はこふ淀野の田子の板舟

はなたちはなに

すきし世の夢にも見えは陰とひて花立はなに宿やからまし

社頭橘

神代をも語るはかりに陰ふりてみ垣へたてす匂ふ立花

梅雨

寢覚うき秋の夜よりも五月雨に長き日をふる袖そかはかぬ

鵜川簞

すゝしくも見えこそわたれう舟さす遠山川のかゝり火のかけ

鵜川歎曙

夏箕川明かたくらき山陰はまた夜深しとう舟さすなり

照射

ふくしさす松よりも先こかるらんともしによるの鹿の思ひは

竹間夏月

若竹のは分の露の涼しさを月も夜なくとめ来てやすむ

夏艸蔵水

夏深く茂る野沢のむれ水くさの下行音もすゝしき

螢

夕くれの葉のほる露と諸共にくさよりいてゝ螢みたるゝ

夕白露

おく露もすゝ敷見えて何となくよしありけなる宿の夕かほ

夕立早過

吹おくる野風を早み夏艸の露も置あへすすくる夕立

暮山蟬

夕露の結ふは山の梢よりすゝしく落るせみの諸声

暑

ふり積る雪ならなくに水無月の照日に絶しのへの通路

船納涼

さしわけて池のはちすを来る舟にこほるゝ露も匂ふ涼しさ

高樓避暑

波間より風もかほりて浦くゝの見るめ涼くむかふ高との

泉避暑

ひむろかと思ふはかりにすゝしきは横たつ山の苔の下水

野艸秋近

咲そむる夏の末野の真萩原花すり衣明日はきて見ん

松風秋近

秋もはやたつかと斗り水無月のあり明の月に松風そふく

夏遠情

おもひやる袖さへすゝし立花のこしまに薰る宇治の川風

夏里海士

里のあまのからきしわさも夏来ては塩たれ衣すゝしからまし

夏旅

夏深き柳の陰の水むまややすらふ袖のあかぬすゝしき

夏雑物

暮かゝる四もとの梢露ちりてまりもて遊ぶ庭そ涼しき

夏祝

早苗とる山田の賤か一ふしも患あるよをうたふゆたけさ

夏祓

老か身の何思ふとて御祓川人なみくゝに流すしらゆふ

山月集秋部

早秋風

ひと夜明て涼しく成ぬ津の国の芦屋の里の秋のはつ風

七夕

けふことにほしの光もやわらきて神代の契り忘れすや逢ふ

雨中菝

うきながら聞つる風も音たへて雨の夜淋し庭の菝原

故郷菝

艸も木も面かはりゆく故郷に菝はむかしの庭のあき風

夕薄

夕風の和たるのへのいとすゝき靡くや露のおもるなるらん

薄閉路

よそめにはなひくと見えて花すゝき道もなきまてなど茂るらん

秋夕

露けさもかくはあらしと墨染の袖をうらやむ秋の夕くれ

田家秋風

もる露もはらひ兼たる暁に秋風さむき小田のかり庵

山明虹半出

山人のつま木に通ふ橋ならてはるゝ尾上に虹そかゝれる

秋田

見おろせはふもとの田のも色つきて年ある秋もなひく民艸

外山鹿

さやけしな晴ゆく夜半の月に巻く釣簾のと山の小男鹿の声

旅宿鹿

故郷を忍ぶ夜寒の床の山をしか鳴音をかたしきにして

虫

身にそしむ里もる夜半の風よりも更行虫の枕とふ声

八朔の日よめる

いつしかと月見る月のめぐりきても中の影をけふよりそ待

十五夜月

なからへて又おもはずもめぐりあふ八十の秋の中そらの月

野月

暮かゝる野への鶉をかりすてゝ小鷹引すへ向ふ月かけ

蘆洲月

うら枯るあしへの田鶴の声さへて洲崎の霜に月そ更行

山家見月

山里に心すむとはなけれ共思ひしまゝに月をこそ見れ

播州記行のうち明石の浦にて法楽

すむ月を神もめてゝや明石かた清きなきさに跡をたれけん

月を見侍りて

時は秋所はさしも明石かたなみくならぬ月をこそ見れ

眺望

明石瀉おきいてゝ見れば朝霧に鴈鳴渡るあはち嶋山

岡のやかたの物語りを思ひいてゝ

なくくも引別れたる中のをのふること忍ふ岡の松風

須磨の浦にて古ことの数くを思ひ出て

ね覚して月にそ忍ふよゝの人の心をよせしすまの浦波

寿永のみたれに亡ひ玉ひし人のもてあそひし笛福祥寺に残りて見

る人皆懐旧の涙をそゝかさるはなし

いにしへのわすれかたみの笛竹に誰も音をなく須磨の古寺

ひゝきのなたも波静かにして高砂の浦にかへりて祝のこゝろを

うら風も枝をならさぬ御代にあひて千年をよほふ高砂の松

入後慕月

やとりぬる露のみ袖に残るかな月は入にし暁のそら

月似古追慕

思ひつる袖をとふ哉俱に見し月は昔の影もかはらて

月前網

難波かたあことゝのふる浦の蟹の声さへすめる秋の夜の月

月前述懐

老楽の涙もはれよ又見んの秋のたのみは中空の月

去年の秋はりま路にて月見し事を思ひいてゝ

すま明石詠めしこそその面かけもほのかにうかふ秋の夜の月

里擣衣

住里のありとしられて霧深き遠山本にころもうつ声

菊有長生種

やま人の千年の秋をつみつるもたねは山路の菊に社あれ

庭紅葉

さお鹿も馴こんはかり庭の面の山里めける木々のもみちは

都の人をとゝめて

みやこ人かはらぬひなの稲むしろかた敷袖のいかに露けき

秋眺望

おしか鳴ゆふへののへを見渡せは尾花か末にいつる月かけ

山月集冬部

時雨晴

おくれぬる冬田のをしね今や刈時雨の雲のはるゝ日影に

山家落葉

しかの音も人めも枯てちり積る庭の紅葉に山風そふく

寒艸風

秋風のつらき恨や残るらんかれてもさはくのへの真くすは

真野のうらの尾花は霜に枯ふしてはま風寒みよする細波

冬日

神無月けふも春てふ名にたてゝのほる日かけにとくる朝しも

山家水

山すみはくみ置水の氷れるを朝な／＼にくたく寒けさ

湖水

浦遠く氷りにけりなさゝ波やしかの山寺かねさゆる夜は

曉寒月

かけさゆる有明の月に聞ゆなりおきそふ霜のしら鶴の声

芦間水鳥

いけ水におれふす芦のさわらてやとも寝のおしの夜かれをもせぬ

水鳥遊藻

朝日さす池の玉もの床の上に霜をわすれて遊ぶ水とり

野霰

みたれたる荻の枯葉の玉あられ秋の野分に増るはけしき

雪中燈

誰か宿そ夜深く積る白雪にうつもれ残る窓のともし火

鷹狩

かり衣すそのの原は冬かれて萩も尾花も鳥の落草

衾

身のたけにあまるふすまの嬉しさもゆたけき年の恵とそ知る

山家冬

軒近き尾上の鹿の声かれて時雨窓うつ宿そわひしき

冬古寺

雪深き尾上の寺の冬こもりひと夏よりも心すむらし

冬植物

ゆふこりの雪間に一木あらはれて寒けくたてる峰の松か枝

惜歳暮

行としのけふの名残りをいかにせんやらふ弓の引もかへさて

山月集恋部

立聞恋

妹か門たちもはなれず聞深くかきなす琴に心ひかれて

見手跡恋

いらへせしかひもなくさの浜千鳥いつ迄つらきあとを見すらん

逢不会恋

一たひの逢瀬の後は飛鳥川思ひはかりそふちとなりぬる

頭恋

うき人の浅き心にちらしぬる水くきよりや名は流れけん

恋長短

つれなしな思ふ数／＼書やれとたゝ一ふてのなけのいらへは

ト恋

こかれつゝ事とふ亀も情あらはあふ夜近しと告てしも哉

窈窕隔簾語

玉たれの内のけはひも見る斗心へたてすかはす言の葉

久待無消息

一ふてのたよりにせよ幾夜半もさわり有なはよし問す共

為君衣裳

今宵しも君とひくやと恋衣たきしめし香をかた敷にして

人被妨恋

諸共に隔てぬ中のかれ行は関守る人の有はなりけり

寄雨恋

今そ知るつらく見えにし横雲のわかるゝ袖の雨となるとは

寄夕恋

立出て夕けをそ問ふとひこんといひにし人のうしろめたさに

寄木恋

こりつみし思ひや終に燃たゝん憂を忍ふのうらのも塩木

寄埋木恋

年ふれとあふ瀬は波に埋木のうき名はかりや朽のこるらん

寄衣恋

哀とはきても見よかし独ぬる夜るの衣のうらふるゝ身を

寄絵恋

すかたこそ筆にもとゝめ世にしらぬ人の心をえやはうつさん

寄螢恋

玉くゝに螢は釣簾ももる物をすきかけも見ぬ人のつれなさ

寄岡恋

靡あふ年もあるやと年月のうきを忍ふの岡の陰草

寄秋鐘恋

契りおきし人は音せぬ秋の夜をひとり寝よとの鐘聞ゆ也

寄名所恋

衣くゝのうきあかつきは音に聞かねのみさきの名さへうらめし

山月集雜部

松樹契久

わか緑たちそふ宿の松か枝に遠き千年の春や契らん

水樹佳趣多

大井川千世も澄らし亀山のみとりの松のかけをうつして

民戸煙

治まれるよの風見えて夕烟ゆたかに靡く民の家くゝ

水郷煙

難波かた入江へたてゝ立けふりあし火たくやの夕けならまし

たはこの歌よめと有けるに

春の野の萩のやけはらそれならて艸も烟の名にそ立ける

涅槃 此のうた寄書述懐の次にいたすへきはづ也

ふたかへり千年をへても忍ふ哉鶴の林の夜半のけふりを

仙山

うれしさもいろにいつみの仙人や治る御代の宮木ひくらし

旅宿友

夢かとおとろかれける艸まくら宮古の友にあひやとりして

渡待舟

みよしのゝ花にやいそくむつた川霞へたてゝ舟よはふ声

羈中衣

立かへり都の人に須磨の浦の波かけ衣ほさて見せなん

閑暁

有明の月に心の雲きへてしつかにそ待山寺のかね

麓菴

山深くおもひもいらて世に近きふもとの庵は住かひもなし

林下幽閑

蔭くらき心ほそさも住なれて松の林に年そへにける

幽栖思友

世をいとふ柴の庵もおりにふれてまつとはなしに友の恋しき

幽居有余楽

よの人のなとか知へきたのしみのなきを樂しむ宿りなりとは

夜灯

夜を深みひとりね覚し手枕に心ほそくものこるともし火

竹間燈

すなをなる道を学ひの窓ならん竹の林の夜半の燈火



杉たてる宿に翁の書を見る絵

いにしへの賢き文を友として世をは余所にや杉の下筒

書画の会筵にて

隠なきすさひとそ見るかく筆の多しまか磯も文字の関路も

田家道

をし手守る庵に通ひし道なれや冬田の霜にのこる一すち

田里夕煙

はるかなる田面の末に立煙誰住宿のゆふけ成らん

長寿水

くみてこそ誰も知らめいく千年いく葉なる水の流れを

川 筏

きのふまで雲間に見えし深山を(木)けふは川瀬にくたすいかたし

名所市

もろ人の何をうるとかけふも又あすかの市に立さはくらん

紫の玉の内に富士のすかた有を

むらさきの雲を姿の玉の内に光さやけきふしの白雪

佐保川

舟人もよきてさゝなんさほ川や波も千しほのもみちはの陰

古寺瀧

水上に寺こそあらめ岩波にしきみ流るゝ山の瀧川

述 懐

櫓後つみ御名となへても我なからすまぬ心の内ははつかし

老前か手にかきならず共笑ふなよ独ぬる身のねやのつま琴

老述懐

灰としもならてたゝく残る哉わかよふけゆく闇の埋火

寄書述懐

灯の影もはつかし文見ればやかて催す老のねふりに

伊 勢

うきなき御代の為とや神路山したつ岩根に跡をたれけん

社頭松

神のます庭の若松千世かけて恵の露に猶そさかへん

菅社九百年祭奉納 社頭松

もゝ年を九かへりの春にあひて万代またん神垣のまつ

八幡宮奉納三景 御垣社

あとたれて御垣の杜の松竹のさかゆくよゝめくむかしこさ

岩 井

くもりなくとはに澄らし岩井なる水の心も神のこゝろも

吉田里

かすみても伊与の高根の遠からぬ吉田の里のはるのあけほの

寄道祝

日はめぐり水は流れて万代ののちもたへせぬ天地のみち

寄龜祝

万代もまよはぬ道のしるへとやふみ負ふ龜も浮ひ出けん

寄神祇祝

かしこしな都の北に跡たれて御代を守りの神の誓は

おほけなくも

ひやゝかなるいつみの流れをくみてふかきおほんめくみにあへる

ことのうれしくいわ井のこゝろをのはへ待るものならし

千世かけて猶もあふかん小倉山さかゆく松の言のはの道

山月集は

冷泉家御門下小松吉田村佐伯貞中之家集也

文政三庚辰年三月写之

芝山家門下若狭介賀茂朝臣重忠

花の下ふし

伊与の国にくたりて日数をかさねしか けふは都のかたに出立とて  
朝とく起て旅よそひす たゝす貞中もよしのの花見にまかるとと  
ともに卯刻はかりに小松を出る 遠近の山々かすみわたり 分ゆく  
のへも草芳しき春の旅路こそいとのとかなれ 鴨川といふところに  
て 高尹

みたらしのなかれにはあらてこゝもまたおなし名にたつかもの川なみ  
都にかへりける人有けるを伴ひて杖をひき出るとて

分見はや身は老ぬれとみよしののよしのの花を思ひ出して 貞中  
海山のうさもいとほし旅ころもよしのの花に思ひたつ身は 忠

こよひは大生院の里といふふるき友の有けるを尋て宿る あるしあ  
つくもてなされて 夜すから盃とりてあそふ 高山勾当もこゝに贈  
り来りてわかれをおしまる 暁かた かきほの竹に鶯の鳴けるを

のとけしなめくりの竹のふしなれてちよを友なふうくひすの声 高尹  
土居の里加地氏のもとにとまる けふは春雨のをやみなくふりけれ

は けふは けふは けふは けふは けふは けふは けふは けふは けふは けふは  
はれやらてななき日くらしふる雨のあすの旅路にさはらすもかな おなし

信之のぬし 柳をわかねんとて歌数々贈りしか 事繁ければもらし  
ぬ 当座をこゝに

松間花

高尹

山松の梢をさらぬしら雪やたちまじる花の盛なるらん

曉郭公

ほとゝきすしたふもあやな有明の月の行多のほのかなる声

江上月

うちなひく尾花の波の末はれてまのゝ入江にすめる月かけ

関路雪

今朝見れば杉のむらたちうつもれて雪にとさせるあふ坂の関

忍久恋

つれなさのかはらぬ中にいつ迄か忍ぶの草のおひしけるらん

寄道祝

誰か国もなへてあふかんあめつちとともにさか行敷嶋の道

讃岐の国にもなりしかは 琴弾の宮に詣侍りて

磯の波松のあらしのひゝきまでしらへあひたること引のみや

有明の浜といふを

よる波の音もしつけき真砂ちに月かけかすむあり明けのはま

袖のうへに影をやとして網引するあまも心や有り明けのはま

山崎宗鑑のすみける一夜庵を尋て

ふり残る草のいほりの松風にこゝろすませしむかしをそ思ふ

伊与路の山々に白雪ののこるを見て

故郷の空をはるかに見かへればかすみへたてゝ残るしら雪

西上人の昔のあとに かた斗りなる庵の見えければ

跡とめて誰かすむらん水くきのおかへにむすふ草のかりいほ

岡の名の水くきにしものこらすはふりぬるあともしられざらまし

名にたてる筆てふ山のむかしをもくみてしのはんみつくきの岡

善通寺にまうて 其里にやとる よをこめて出行に霜置わたして袖

さむし やうく日の出るを待ゑて

忠

貞中

高尹

信之

信之

高尹

忠

貞中

忠

貞中

おなし

高尹

忠

朝日かけうつろふかたは霜きえてみとりにかへる野辺のわか草 高尹

象頭山の社頭にまうて侍る けふはやよひ十日也ければ参籠の人々

所せきまでみちくたり 法衆の心を

あふくそよみかきの松の幾ちとせめくみたえせぬ神のろかひを 貞中

丸亀といふ所の浦より船の便もとめていつる はなれたる小嶋に人

家の見えけは

世はなれていかなる人のすむならんおきつ嶋根に見ゆるいほりは 高尹

末のさかりに汐あしく風なきたりとて 汐とをしとかいふ所に船を

よする 皆々あかりてつゝしなと折てあそふ

打よする波の花さへ色をそふいそ山つゝし影をうつして 高尹

そや過る頃より追風になりぬとてこきいつる おほなる月にそこ

はかとなくわたれる船のおほつかなきに

海原のかきりも見えすはるくとなみちかすめる春の夜の月 おなし

夜明て見渡せは めてはさぬき ひたりは吉備の国といふ 八嶋の

浦牛窓など聞つるもよそながら詠めやりぬ こよひは高砂のうらに

泊る

高砂の浦吹松のはる風をうきねなからに聞ものどけし

鐘の声に寝さめて

月落る尾上のかねに船人のゆめもおとろく高砂の浦 貞中

あはち嶋

神代をも思ひこそやれいつる日のひかりに霞むあはちしま山 たゝす

あし原の国のはしめの神の代をあふくも高きあはちしま山 高尹

しかまのちかゝにと思ひ侍れと 乗あふ舟のならひ心にもまかせさ

りければ

よそなからみるめからはやすま明石うらの霞のたちへたつとも 貞中

けふは風よしとて真帆引て難波のうらにつく 四橋の辺に宿り求め

て舟路のつかれをいかふ しはし留りてこゝかしこ見めくるに 里

とみかまと賑はひてちふねもゝふね入江につとひ 名にしおふ難波

の道もさかふるよし聞に

今も猶かまとのけふりたちそひてかすみわたれる難波津の春 忠

住吉にまうてゝよめる

あとたれて此うらにしも住よしの神の宮ゐの幾代へぬらん 高尹

かくて浦わにいてゝ岸のむかひを見渡せは 淡路嶋波間にかすみ

松樹千年の緑をそふる春の海辺のすみよしのはまこそたくひなき

見るめには侍れ

すみの江にかくともつきし神代より久しくつもる松の言のは 貞中

車かへしは桜は慈恩寺に有と聞て尋行に 折しも盛なりければ

小車をかへしてめてしいにしへもおもひそいつる花のゆふはへ 貞中

四天王寺にて

末の世にのこす恵をあふく哉とをつ国より法をつたへて 高尹

ちりのよのにこる心をそゝけてと亀井の水や清くすむらん おなし

柿本明神の法衆に歌たいまつる

手向はややよひのけふの神祭るおりにあひあふ花の白ゆふ 貞中

かうちの国にもなりしかは伊駒を詠やりて

いこま山花のはやしもみえわかす雲のたちまひ春雨そふる 高尹

大和川をわたりて

やまと川幾瀬をこえてさす舟の霞のをちにとをさかるらん たゝす

誉田の御陵道明寺を拜して玉手山といふに来る

おく露の玉手の山のいはつゝし花の光りもことに見えけり 高尹

壺井の水は源頼義みちのくよりうつし給ふといへり

世々ふともたえしとそ思ふ神垣のつほ井の水の清きなかれは おなし

上宮太子の御廟を拜して山田とかいふ所に一夜を明す 朝またきに

出立て 岩屋こへといふ所を通りて当麻寺にまいる この峠を河和  
の境なりと聞ゆ 尋ねまほしき名所多けれと花は七日をかきるとい  
へは 心いられに見残して行

葛城山

春は猶花のしら雲たちそひてよそにもしるきかつらきの山 貞中

車坂といふをこしけるに

山そはをめぐりてのほる道なれはくるまさかとは人のいふらん 高尹

程なくよしの川に来る 土田より渡し舟の舟にのりて六田につく

ことゝはん六田の淀のわたしもりよしのゝさくらさかりなるかと 貞中

風わたるむつたのよとの川柳なびくみとりの色そかすめる

こゝを柳のわたしといふ しはし坂を登りて

さく花もやゝ見えそめてみよしのゝ山口しるく匂ふはるかせ 高尹

薪をおへるおのこの花をはそへさりければ

よしの山花折そへぬ柴人はなかなかふかき心とそしる 貞中

よしのの里に着けるに 花は頃日盛也とて聞しにまさる景色は 誰

か筆もいかて及ふへしや 先一目ちもと蔵王堂のあたりをわけくら

して 日もはや入かたになりぬ

ふもとなる詠めにくれぬよしの山おくる花をあすは分見ん おなしく

あま野何某かもとに枕かりて

鶯もおなしたくひにみよしののはなの宿かる春の旅ふし 高尹

あるしのかふか屋はこゝにやとりし人のうた書のこざれしとて 取

出て見する

花盛けふこそ見つれ年々におもふ斗のみよしののはな

尾張の国敬典としるせり 外にもあるりしかもらしぬ 山の端もは

やしらむかとおほめきい出て

たちこむる色香に猶やかすむらんちもとの花の春の明ほの

忠

御船山

朝日さす御船の山はうらゝかにかすみ波そたち渡りける おなしく

ことしは近き頃よりいつにかはりてあたゝかなるにや 峰も麓もへ

たてなく盛になりけるは いとめつらしと此里の人もいひ侍りし

さきぬへき日かすかそへて分しかはおりもよしのゝ花さかりなる 忠

実城寺吉水院を拝みめくる ふりにし皇居なりと聞ゆ

いにしへのよしのゝみやの跡とめて幾はるのこる花のふるてら 貞中

花見る人あまた打むれてさゝめきあへるは 更に山のおくとしも見

えず 中々奥なき心ちせらる むかし此山にのほりし頃 桜の苗を

栽植し事を手を折て見れば みそしあまりみとせにさへなりぬ け

に思ひきや かゝらん後までも分見んとは

うえ置しむかしかたらへ山さくらともにあまたの春をかさねて おなしく

袖振山

乙女子か袖ふる山にさくはなやよゝにふりせぬかさし成らん たゝす

天武天皇の琴弾給ひし瀧の宮といひしはいつくにはありけん 竹林

院の芝生にしはしやすらひ 雲井桜瀧さくらなと詠めてゆく みこ

もりの神と詠せし宮るをも拝みて岩の陰道分つゝのほる

みよしのゝ奥もまよはし咲つゝく花をしほりの春の山ふみ 高尹

岩たゝむ瀧つ山川の瀬をはやみくたけておつる水のしら玉 おなしく

金性明神の辺に義経の隠れし塔有 万葉によみし高城山青根か峰も

まのあたりに見えたり 安禪寺より三丁奥に四方正面の堂 こゝを

おくの院とかいふ 苔の清水は今もとくゝ落て 心をすます人の

たつきとはなれりける このみたけは名たゝるくまゝおほかれは

日をへても見まほしけれと 都の花の折過なん事を思ひて たちい

つるとて

わきて猶名こりをそ思ふ山桜老はまた見ん春をしらねは

貞中

坂をくたりて飯貝といふ所より小舟に棹さしていもせの山の中を渡る  
こゝを桜のわたしといふめり

よしの河早瀬をくたすいかたしの袖にほふらし花のしら浪 忠

吉野川岸の山吹咲にけりあゆくむころもちかく成るらし 貞中

上市に上り是より多武峰に越んとてけはしきつゝらおりをのほる  
過こしかたを見かへして

分入て見しみよしのゝ花なれやとをさかる山の峰のしら雲 高尹

ほとなく着ぬ こゝは大職冠の神廟なり 花の梢社頭に映していと

うるはし 倉橋山をへて初瀬の麓にやとる

たくひなや花の匂ひもこもりくの初瀬の山の春の明ほの 貞中

吹おるす松原の風の匂ふかにはつせのさくらさかりとそしる 忠

古河野辺に杉のたちとを尋ねて 奈良のかたへとゆく 磯城嶋とい

ふ所は欽明天皇の都金刺の宮の跡也といふ 高円山はたつみにあた  
りて見ゆ

のとかなる春のめくみを敷しまや高円かけてかすみ渡れる 高尹

よそよりも深くかすめり敷嶋のたかまと山のみねの松はら たゝす

春ことに草のみ生て高まるとのおへの宮やあれまざるらん 貞中

天香具山畝火耳無など霞へたてゝ見えたり 佐野のわたりを人にと

ふに今過こし跡こそそこには侍れといふ すこしの事にも先達はあ

らまほしきと彼法師のいひしも思ひあはせて侍る

### 三輪

いくよへし梢なるらん三輪の山杉をしるしの神のみつ垣 高尹

まきもくのあなしの山右に見ゆ 結環塚を

くりかへし誰忍ふらんをたまきの名をのみ残す野への古塚 貞中

内山の精舎にまうてゝたとくしく山路を行は杉むらふかくしけり

苔あをらかに生て さも物さひし宮居あり 是なんふるの社也とい

ふ

陰深くいやおひしける杉むらにふるの神かきかみさひにけり 忠

こかくれのふるの山田はゆふへをもまたてかはすの声々になく 貞中

此のあたりに紀有常のやかたの跡あり 井つゝはうつもれて草深く

生たり

今は世にくむ人もなし筒井つゝいつゝの水の名のみ流れて おなしく

柿本寺の師玄和尚は道のすき人なればはしかたらひて出つ うた

塚といふに詣てゝ

古塚のむかし尋てことのはのたえせぬ道をあふくかしこさ たゝす

在原寺をとふらひて ならにつく 故郷となるたにかはかり賑ひさ

かへり ならのはの名におふ宮のむかし思ひやらる

春日野

めつらしな人にもなれて棹鹿の花を分行かすかのゝ原 貞中

暮て後明神の広前にまうて侍る

あきらけき世をてらすらしかすかなるみかさの宮のちゝのともしひ おなしく

けふはあまたの名所を見て侍りけれと いたうこうしにたりて書も

とゝめすふしぬ

つとめて平城をまして秋篠や外山の里もよそから詠めやりぬ い

つみ川を舟にてこすに けふは雨ふりて川風いとさむし 井手のを

とゝのすみ給ひし跡はえも尋ねず 小倉堤にかゝる ふしみの里よ

り雨もやゝ晴て黄昏の頃都に着 室町通にしれる人の有けるを尋て

宿りをしむ 高尹のぬしはわかれて新玉津嶋にかへりぬ 弥生も廿

日余りなりければ 都の花のうつろはぬ間にと日ことにてゝさく

らかりす 嵯峨のかたは山の嵐に雪とふりしよし聞えければ まつ

かみのそのふ花の頂などのさかりを見る

のとかにも袖をつらねて分くらす花の都の春のもろ人 貞中

双林寺にむかしの跡を尋て清水寺にまいる

世の人の心のちりやすくくらんなも清みすの瀧つなかれに おなしく  
仏光寺高倉西に入所に静なるやとり有けるか しはしたにこゝに行  
ねかしと人のすゝむるにまかせてやかてうつりぬ 同し家のかたへ  
に日向の国のものゝふなる人文字か関の一僧かりに住り 皆窓の灯  
に書をよむ人なり 又尾張の国なる人の糸を手すさあせるも居たり  
ともにそこゐなく旅ねのうさなとかたらひあひ侍りし藤原の笹丸か  
ぬしは去年の秋いよの国へも下られて因あさからねは 日をかさね  
て此道のもの語りす

三月廿六日

於宮井 興行

崇徳院法楽千首之内

当座詠七首

見花

高尹

いさゝらはめかれぬ花の木のもとにうつるふ迄は旅ねして見む

水辺螢

たゝす

飛ほたる影もなかれて涼しきはゆふくれ深きのへの沢水

夕立

高尹

かきくらしふるを見し間に空はれて夕立すくる風はすゝしき

夏祓

秀貫

秋風もかよへる浪のたつた川なつはらいするゆふへ涼しき

湖月

貞中

湖この海よさむの月の影更てをとすみまさる志賀の松風

瀉千鳥

如韻

沖つ風さむく吹らしさよ千鳥しほの干かたに声聞ゆなり

積雪

たゝす

夕くれのまかきも山と見ゆるまでふりつもりたる庭のしら雪

北野の聖廟にまうてゝ

幾春のさかへはつきし松梅もおなしみかきに殿つくりして 貞中  
つゝしのあまた木高くさける古寺あり きりしまなどいふ  
いくとせの春をふりてもふりせぬやそむるつゝしの花のくれなる 忠  
しつかなる住所もとめて茶の道をもてあそぶ翁の有けるをとふらひ  
ければ あるし  
まれ人の尋ね来つれと花もなし草のいはりは春をよそにて 了閑  
返し

返し

奈良にては折返してふ八重桜なを九重のさかりをも見よ

返し

けふこゝに見るもめつらし八重桜ならの都のたねをうつして 貞中

此花は昔東円堂の苗をうつされて今も春ことに禁庭にさゝけ給ふと

聞ゆ 尚竹のぬしは故郷の人なりしか 雲の上につかへらるゝこと

とし久し 国にも折々かよひて道の交りをなすこと浅からすこそ

三浦信賢のぬし よしのの桜のこととはれければ

よしの山盛の花は見つれともそれとこたへんことのはもなし 貞中

返しも有けるかもらしつ 都のうちながら山すみめきたる宿りにし

て みつからもとゝりをなんとりける時 忠 改 円浄

われとわかかしのらのかみはきりすてつかてこゝろのちりをはらはん

身はすてつ心をたにははふらさしつゝゐにはいかゝなるとしるへく

と興風のいへらく あつき弓いそちの末に入もて行けはこゝろし

ろひすへきを いてかてにのみ門させりとのかれたたき世のなら

ひなれば 草枕旅の宿りにしてかさりおろされたる心清きわさな

りけり ちりをはいつかはらはんといふめるこそおほつかなきや  
猶もほたしにかゝつらひて 淨く久しくまろらかなる名にはおほ  
さゝらめかも  
新玉津嶋社主  
周尹

周尹

心たに世にはふらさすましろはちりの中をも身にはいとほし  
夏衣すかたもかへておもひたちいりぬる道やすしかるらん  
高尹

墨染のころもへすして奥深きのりの道にや尋ねいるらん  
貞辰

うらやまし花見かてらの旅ころもまことの道におもひ立身は  
房雄

空蟬の世をはかなしと身をかへてころしつかに今はへぬらん  
敬通

夏衣けさはやかに立かへし人のころやすしかるらん  
安世

かく斗うきを忍ひてそむかぬに人はやすくも世をのかれけん  
貞中

我友はうらやましくも黒かみをすてそちりの世をのかれける  
松月

まとなる月の光をころにていさきよき身の世を久にすめ  
祐為

何の道も頓漸のころはへたてなかるへき事そかしなと思  
ひて  
芦庵

もとよりもにこりにしまぬはちすさへ日をつみてこそ花はひらくれ  
弥生もけふのみになんなりければ春の余波おしまんと出たつ

紫野にて

むらさきののへのゆかりのすみれ草春のかたみにつみてかへらん  
貞中

日枝の山にむかひて

あつましの高根はあれと名にしおふみやこのふしの霞む長閑さ  
円淨

紫式部の墓千本のあたりには有といへとさたかにもしれす  
鹿苑寺の

黄金閣にのほりて

高との影をうつして水そこにかねをしける池かとそ見る  
貞中

衣笠山

春は猶花のにしきをおりそへてさしもはへあるきぬかさの山 おなしく  
双岡長泉寺にて

みし人を猶こそ思へちる花の雪とうつめるおかの古塚  
円淨

仁和寺に詣て三月尽を

このもとにせめておしまんちる花とともにわかるる春のなこりを おなしく  
衣かへの日よめる

夏きぬるけふのならひにみよしのやま分衣かへまくもおし  
貞中

花の香になれし衣もぬきかへてきのふの春の名残をそ思ふ  
円淨

頃日 年号改りて天明となりぬ よつの民万代をうたひ おほんう  
つくしみの彼人の国迄なけれけるそいともかしこし けふは糺の森  
に行て祐為のぬしをとふらふ かも川の音にのみ聞しをなといひて  
いさきよくすみならずらし石川やせみの小川の水のころは  
貞中

返し

とはれては何とかいわんいし川や蟬の小川の水のころを  
祐為

はやうのほりける時を思ふに はたとせ近くそなり侍りける わす  
れやし給ひけん

あふひ草かけし契りのかひありてその神山をけふそたつぬる  
円淨

返し

あふき<sup>ツマ</sup>草かけし契りもけふそしるわか神山の陰をとはれて  
祐為

神楽岡にまうて松岡雅翁をとふらひしか おきなとりあへず  
伊与の国より我交りを求めぬる人のしを聞て

夏かけてことはのはやし尋ねこし人のたもとやみとりそめけん  
雄淵

筆の跡もいみしく見侍りて

とし高き老木は夏に陰そひてわかかへる手の色そすしき  
貞中

けふは湖の海つら行て見んと 高尹のぬしをさそひていつ 朝また  
きにうたの中山をこえ逢坂の関路にむかふ 又春の名残も遠からて

藤つゝしこゝかしこに咲のこりたるに 木々の梢若葉さしましへて  
時しりかほなるもあはれなり けに道しある御代としてしるもしらぬ  
も行かふ中に ものおへる牛の関の清水に影見えなんとするはこと  
に興ありておほゆ

戸さしせぬ御代そゆたけき逢坂やせきの行来の人を見るにも 円浄

一木の桜のちりのこるを見て 高尹

あふ坂の関やとめけん道のへに春をのこせる花の一もと 高尹

一とせ吾妻に下りし事のこゝろにうかひて 貞中

ふりしよのふしの白雪見し旅も思ひそいつるあふ坂のせき 貞中

うち出の浜より浦つたひに粟津の松原さして行 湖辺の眺望けに類

ひなく もろこしや西のみつうみまたみねとゝ光広卿の詠も思ひ出

待りし 円浄

さゝ波やにほの海つら夏も猶遠きはかすむ沖のつり舟 円浄

勢田にて 高尹

あふ坂の関路をこえてあつま路にわたらまほしき勢田の長はし 高尹

石山 円浄

いし山やうこかぬ御代に御仏の光あまねく照まさるらし 円浄

他山の石にはあらねと 貞中

御仏の光もふかき石山にころものうらの玉やみかゝん 貞中

この頃は大ききの御戸ひらかれて いともしやうに拝まれ給ふこ

そ有かたけれ 月見の亭に登りて海つらを見渡せば 鏡上上の山の

緑をひたせる中に比良の高根は雪残りて見えけるこそめつらかなれ

浦辺に伊勢おのあまをつれ来りて水そこにかつきさせ 人に見せて

錢を乞ふ 貞中

海の名のには鳥ならて水そこにかへよるあまを見るもめつらし 貞中

こよひは三井寺の玉泉院に宿りぬ 三位のひしり出むかへられても

てなきる 覚禅院の大ともこゝに今そかりて しかの都の昔かた  
り聞え給ふ 庭の面ものふり池水清くたゝへたり

むす昔もいくよふりぬる岩間より落てすみそふ庭の真清水 円浄

旅寝するまくらにきけはかねの音もむかしになりぬ三井の古寺 貞中

夜明て後も猶物語つきす時をうつつ 始めの帝の御ゆひ納め給ひし

燈幢しらきの宮など拝みていつ あれにし都の跡を通りて辛崎の松

陰にしはし円あして蓋をめぐらす

いく千年くむともありしさかつきにみとりをうつつすしかの松かけ 円浄

日たけければたちかへるとて 貞中

もろ人の分見し花の春過て若はにしけるしかの山越 貞中

しら川の流を渡りて夕へつかた都にかへる

隣なる家に世をそむけし僧の住れけるか よなく琴をひき給ふけ

れは 円浄

いねかてに声をこそきけかりふしの枕にかよふよはの松風 おなじく

また雨のふりける夜聞侍りて

あしかきの間近く聞はつれくくと雨にしらふるつまことの声 円浄

おなし国なる松山に仕らるゝ昇義のぬし としころおほやけのつと

めによりて都にありけるをたつねて おなじく

とひよりてけふこそかたれ松山のまつらんとしもしらぬあるしを

返し 昇義

松山のまつも久しく待つけれしやとにかはらすとふよしも哉 昇義

卯月十二日つとめて東福寺に詣はへるに東瑞せしは故郷の産なりけ

れは ねもころにとゝめられて時をうつつ 此日稲荷の祭也とて森

河氏のもとにまねかれ 神輿のわたらせ玉ふを押し 浅からぬもて

なしに夜更て旅宿にかへりぬ 明れは玉津嶋明神月次の和歌なる日

なりとて席をもふけられし当座



立春天

夜をこめて春やたつらん鳥がなくあつまのそらそしらみそめける 周尹

嶋霞

海原の沖の小嶋も春かすみたちへたてゝや遠く見ゆらん 惟一

尋花

そことなく花を尋ねてけふもまた霞をわくる春の山ふみ 貞中

郭公未遍

ほとゝきすおのかさ月をまつほとやなく音あまたに聞えさるらん 房雄

待七夕

天の川秋のわたりになりぬれはけふのあふせをほしや待らん 宗順

原鹿

から衣すそのの原の秋霧にたちまよひてや鹿の鳴らん 松月

夕月

あつさ弓いるさの山のゆふ月夜かけ見るほとすくなかりけり 如韻

杜時雨

秋に見し色をさそひてこからしのもりの木のはそ打時雨ける 円浄

寄筆恋

ふみかよふことないとひそあふ迄のいたみとも見んみつくきの跡 景一

名所汀

いたつらに年をやへなんわかか浦の汀の波の玉もひろはて 高尹

羈中山

山高みのほれはちかく故郷の見ゆるに猶そこえうかりける 安世

寄地祝

万代もうこきあらめやあらかねのつちよりなれるやまと嶋ねは 松尹

真如堂のかたほとりに飯塚道義の主の墓ありと聞て尋ね行ぬ この

ぬし久しく都にとゝまりて さるはかせにしたかひ ひしりの道を

まなはれけるに ふ幸にして世を早ふせられ侍りし

はかなしな馴にし里をわかれきて都の野への露とふる身は 貞中

こゝはなき人のしるしの石多きやうに知れる人の名も数々見え侍り

てすゝるにかなしうこしかたの忍はれ侍る

岡崎のほとりに庵をしめて世をいとふ人の有けるを訪ひて

ことしけき世をはのかれていかはかり心のうちのしつけかるらん 円浄

返し

とはれしも猶やうれしきしつけさのよそめにたかふこゝろならずは 澄月

岡崎の田つらにつゝく夏草のつゆのやとりはすゝしからまし 貞中

返し

とはれけることのは草に夏艸の露のやとりもけふはすゝしき 澄月

於旅宿当座

花もてはやす

あかす猶花もてはやす人をしもけふはとひきてともにこそ見れ 景一

あふひてふ名を

よゝかけてちきりわするな乙女子かゆふかみ山のあふひてふ名を 周尹

てる月影の

白露をてる月かけのさやけさに玉をしきたるのへかとそ見る 房雄

まつ初雪を

都人まつ初雪をさくはなのはるの梢と見つゝ折らん 貞中

あひ見て後そ

うつりかの袖にのこりていとゝ猶あひ見てのちそ思ひまさされる 円浄

まさきのかつら

よりかけてまさきのかつら長き日もかたらふほとそみしかかりける 如韻

袖もみちと

秋山の下てる道を分行はそももみちと人や見るらん 高尹

時雨そ冬の

もみちはをときわの里にさそひきて時雨そ冬の色を見せける 安世

於中川亭 即興

柳露

よりかけし柳の糸の白露はみとりの玉と見えまかひけり なを女

夏艸

行かよふ人の為とや夏の野にしけれる草をむすひ置けん 安世

湖月

から衣うち出の浜の秋風に身にしむはかりすめる月影 円浄

江寒芦

難波江のあしのかればの風さえてふきはらへ共霜そこほれる 貞中

田家暮雨

むらくにゆふけのけふりたつ見えて山田の里の雨そさひしき 周尹

午の日は下加茂にまうて御蔭山よりの神幸を拜したてまつる みた

らしのなかれにそひて道すからの音楽たへに聞ゆ

波の緒のしらへをそへてものゝ音もすみ渡りぬる賀茂の川つら 貞中

けふは猶すゝしかりけり水鳥のかもの川せによするしら浪 なを女

高一見道のぬしを尋ぬ けふは祭なりとて酒たけなはなり 皆人酔

しれてあされあへる 或人 年々掛葵といふ事をよめといひければ

よめる

神山におふるあふひのもろかつらやそうち人やよゝにかくらん 円浄

行末のちとせをかけてあふひ草けふのみあれにかさしきぬらし 貞中

上賀茂の社にまうて初音を聞侍りて

神山を出そめぬらしほとゝきすかものはらに鳴わたるなり おなし

宇治の里にと志して出るに村雨にさへられて禺中になんなりぬ 元

政治家のすまれし深草の庵を尋ぬ 木幡を過 彼里にいたるに山の

たゝすまゐよしつき たとき寺々川つらに望み 橋上の旅人浪間さ  
す柴舟なとめもあやなり

都にもほと遠からてすむ里をうちとはたれか名つけそめけん 貞中

名たゝたる所々たつねて通円か茶店のあたりにとまる 神無月朔日

頃あしろもおかしきほとならんといひしにはあらて 蛩飛かふ夏川

のなかれすゝしさあかす 枕とる間もなく明ほのしろくなりぬ

朝日山

わか葉さす梢もはれて山の名の朝日向ふ影そすゝしき 円浄

宇治川を舟に乗て

山川の岩こす浪の早き瀬にさしもまとはぬうちの舟人 貞中

時の間に伏見につく 千里江陵一日還と賦せしも思ひ出ぬ

葵祭の日都人伴ひて下加もの社にまうて侍る 晝かたより雨ふりし

かてけ直りていと賑はし 祭司終りて後 祐為のぬしのもとにて

題をさくる

湖辺霞

けふ見ればひらの高根の雪きへてまのゝ江遠くかすむのとけさ 祐為

花盛

春風ものとかにかすむたかねよりふもとをかけて花そ咲そふ 敬通

初時鳥

ほとゝきす初音鳴也みあれひくそのかみ山のむら雨の空 通生

山月

神山の松の木の間を風ふけはひかりさやけき秋の夜の月 祐照

紅葉深

秋ふかき木ゝのみちは山姫のこゝろのまゝに染つくすらし 宣由

松雪

ゆふまくれ松の梢もうすもれてふりつむ雪の宿のさひしき 祐照

忍涙恋

うき中に落つるなみたの瀧つ瀬をせきとゝむへきしからみも哉 貞中

待恋

つれもなき人を待とて夕ぐれの雲のたちゐるものをこそ思へ 通生

田家水

庵近き小田のさなへのいろ見えてあせこす水そすゝしかりける 円浄

社頭

幾千世のためしもしるしあふひ草かけてそむすふ加茂の神垣 宣由

わかれをなしてかへるさ二条東洞院を通る 伊勢の御の家の跡なり

とて 能因法師か車よりおりけるはいづくにかありけん 伯玉はお

ほやけをたとみ 是はいにしへをこふるにやなといひて過る

一窓上人高野よりせうこそせられしおくに

とへかしな月は青葉にうとくともあまねくてらす法の御山を

と有けるかへし

あふくへき法の御山をとひもせて都にのみとくらすをろかさ 貞中

嵯峨野のかた見残し侍らんはほいなしとて安世のぬしを伴ひゆく

梶の宮松の尾法の輪寺なと拝みて渡月橋をわたる

夏の夜の霜かと思えて大井川わたせる橋の月そすゝしき 貞中

小督のかくれられし跡も此のあたりになと人いふ

かくれ家の跡も残らすあはれたゝ松ふく風のをとほかりして 円浄

大井川のきし伝ひに川上にのほればそこにも見ゆる龜山の陰より後

さしくたし 早瀬の浪に引綱のをのかさまゝなせるわさも逍遙の

人をもてなすかとおほめく 客を留る宿りもつきゝしくもふけな

して けにたくひなき壯遊の地になん侍る

嵐山

折過てむかふあたしの山さくらわか葉にかはる色もめつらし 円浄

岩はしる戸なせの浪もひゝきあひて山のあらしの音そこたかき 貞中

ありす川の流にそひてたかむらふかく分入は 黒木の鳥居いとかり

そめに小柴垣藤まつへ夏草しけりあひぬ 秋ののはきの残れるたね

にこそ それより小倉黄門の山荘の跡を尋ぬ 常寂光寺の辺にあり

むすひ置し秋のさかのゝいほりより床は草は露になれつゝ 彼卿

為宗卿も統てこゝに住み給ひし時

住そめし跡なかりせは小くら山いつくに老の身をかくさまし

かく詠し給ふといへり

やとりせしむかしの人の跡とへは昔のたもとに露そしくるゝ 円浄

夏こそは木々の若はにしけりあひてをくらの山の名にしおひけれ 安世

都のいぬあとよみし寂蓮法師のあともなつかしけれとえしも尋ねず

すへて此あたりは見所おほく このもかのもに吟ふ 定家為家両卿

の御墓にまうて侍りて

ことの葉の露の古塚とひよりて道のむかしをたれも忍はん 円浄

川鶴采女なる人はやことなき御方に宮つかへして嵯峨の辺にすめり

安世因あれはとふらひてかたる 日もはやあたりの山端近くなるま

ゝいとま乞てまかてなんとする折しも村雨につれて山時鳥二声三こ

多音つれければ

尋ね来てけふきく声のあかなくにまたもとひこん山ほとゝきす 安世

あるしの妻みさ女袖をひかへられて

郭公鳴つる暮のむら雨にふりいてゝなと人かへるらん

あるしせちにとめられて さかなき野辺の草枕も一夜はむすひ給へ

なといふ おものまいらせんと 西川のあゆかものいしふし何くれ

てふせられ さかつきの数もかさなりければ

あさからぬ糸にしあれはや呉竹のよはのやとりのなさけをそくむ 円浄

こゝにみさ女のゆかりの人に あふみの国のをうなの居けるかま

ろうとのなくさめにもと琴とうてゝかきならず 夕暮の名残の露に  
庭の若葉打なひきてすゝしけなる月の簾に入さへ有に いともしつ  
かにしらへなすをとほ 巫山の夜の雨湘水の秋の浪もまのあたりな  
るかよと こよなふあはれになん

はるくゝとさかのゝ露を分こすは玉のことをいかてきかまし 貞中

よこ雲もはやたえゝなる頃 引わかれて都にかへる

いにしへを思ひ出つゝこえそゆくちよのかけある松の下みち 円淨

いつしかと卯月も暮ければ 五柳先生かそのふのあれなんといひし  
にはあらねと かへりなんとわかれを告る 馴こし都の人々またい

つかはなといひて ねもころに余波をおしまる 船路にかへる旅な  
から馬のはなむけせしためしもあれはと からのやまとの歌つくり

物かつけなとせらるゝもわりなし 新玉津嶋の社に詣て笹丸のぬし  
に申侍りし

ふるさとかへらんもうし言の葉の道のたよりの友にわかれて 円淨

返しにたはふれて

いつはりを誰にいふそも故郷にかへらんとのみいそく身にして 笹丸

おなし人にむかいて

あさからぬことはの友になれてよりいとゝ都の空そたちうき 貞中

返し

みやこをはかへり行ともわすれめやなれてかたらふことのはの友 さゝ丸

おほけなくも ひやゝやかなるいつみのなかれをくみて ふかきお

ほんめくみにあへることのうれしく いわ井のこゝろをのはへ侍る  
ものならし

千世かけて猶もあふかん小倉山さかゆく松のこの葉の道 貞中

天明元丑四月廿八日

右者

冷泉家御門下

小松里渡辺円淨之以直本写之置者也

干時 文政三庚辰年二月日

芝山家門下

須藤若狭介重忠

### 周桑歌人集

序

吉田の里に年経てすめりける翁あり 松下庵の貞中といへり 又山月翁  
とも人はよふ成へし むかし予と俱に和歌の浦わに心をよせてあし辺の  
田鶴の友よひかはし樂を同しうしてあまたのとし波をかけ来りぬ 翁こ  
とし八旬のとしと成ければ 鳩の杖つくとも尽ぬゆく末を寿て 人々和  
歌を詠し詩を賦しされことうたはい句など家くゝの言の葉を贈り給ふ  
頼に書つらねて児孫に伝ん事を同氏美文なるものはをこひねかふ 唐土  
のひしりの文に五福をいつるにもまつ寿を貴ふとか聞はいともむへに  
覚てことのあらましをしるし侍らんと天善隱叟見阿一字庵にして毫をと  
るものならし

享和三つのとし

癸亥の冬 吉展

年賀

座光寺公 通祇

やそち経て後もたのしむ言のはにめくみそひゆく春や幾はる

貞中老翁八十賀

鶯知春

雪きえぬ谷の戸いてゝ鶯のみちし有世の春やつくらん

正脩

若菜

田鶴のゐる沢辺のわかれけふよりのちとせの春にたれもつむらん

李代女

雪中梅

日かけさす雪のかたえに咲そめてはるかせふかく匂ふ梅かゝ

重明

霞

此朝気むかふこゝろものとかにてはるにかすめるをちの山のは

好成

柳

浅みとり色そめかけてしら露のたまぬきとむる青柳の糸

則明

江春月

すみの江や松吹かせものとかにて浪間の月のかけそかすめる

快如

春雨

のとけしな霞める野へに若艸のみとりそひゆく春雨の空

通惇

春駒

難波江の芦のわか葉や生ぬらんみきはにあさる青さきの駒

つな女

初花

色に香になをこそめつれ老木にもおひせす咲る今朝の初花

勉

社頭花

のとかなるはるのひかりもさしそひて神のみかきのはなそ咲ける

真恒

桃

老らくのよはひかさねて三千年のはるをくみしる桃のさかつき

謙則

堇

紫のゆかりの色にはてもなくすみれ花さくむさしのゝ原

穎義

苗代

春雨に水せきいるゝあらそひもあらてゆたけき賤か苗代

義道

松藤

むらさきに幾しほそめて松かえにこたかくかゝるはなの藤なみ

道一

春祝

幾かへりはなやみるらん八十よりやをよろつ代の春をかさねて

見阿

貞中老人の八十の賀に

寄竹祝

友とみて契りをくらしさゝ竹のよゝにさかゆく宿のことふき

正綱

松下庵隠翁の八十を賀して

深みとり立かさねつゝことふきのちよをしらふる松のはる風

幾はるも色そふ松のした庵にすみて葉ことの千世やかそへん

春かすみたち隔たれとへたてしなちよませといわふ心はかりは

かねて経し春のならひに花咲ん百とかへりもまつのした庵

庭松契久

我友と聞てよはひやちぎるらんちよの声ある庭の松かせ

言の葉の色そふ庭の松かえにちぎるも久し老の行すゑ

幾千年やとにさかへて老らくのよはひともなふ庭のまつかえ

庭のおもの松もさかへて末とをくなく千よのよはひ契らん

幾ちよもさかへ替らぬこのやとによはひをちぎれ庭の松かえ

十かへりのはなも待みん言のはのみとり生そふにはの松か枝

庭のおもの松のいく代を友とみてよむことのはの数もかきらし

幾ちとせみきりの松の陰しめてちぎるも久し老のことふき

いくかへり友と契らんにわのおもの松も千とせの春にさかへて

年毎にみとり生そふ庭の面のまつのよはひを猶や契らん

右西条連中

松下庵の尊翁八十の賀筵を開き給ふと聞て

今治 玄田

あつさ弓やそしのはるのふかみとり千代たのみ有まつのした庵

八旬祝詞 京 逸齋

十つをやの神山あとにみてなをのほるへき末そはるけき

洛陽逸齋のおきなのもとより鶴の羽をもて作れるみつ羽を贈らる

とて

朝な夕な手なれつ見よ齡なをきみにゆつるの千代の翅を

かくなん有ける返し

思はずよ齡ゆつるのときを得てあま飛ふつはさ手に馴んとは 貞中

八十賀 西山隠士 光幢

八十よりも年こへて千代をまつ松にはな咲春やむかへん

祝詞 有政

ことの葉に老をのはへて十かへりの花さく春をまつの下岸

寄神祝 明川 之尚

みつくきの久しかれとや守るらん八百よろつ世と契る神風

寄松祝 全 みよ女

幾春のみとりをそへてこの宿のさかへ久しき庭の松かえ

全 新屋敷 民女

十かへりのはなさくまでと松かえによはひを契る老のことは

全 壬生川 もと女

この宿の軒はの松に老ひとのよはひちきりて春や重ねん

祝 新町 たか女

万代の春をかさねて軒はなるまつにともなふ老のことふき

松下庵貞中のぬし八十の賀をことふき侍る 全 弾任

ちきり置て長閑に住ん八十より後のちとせをまつの下庵

貞中のぬし八十を祝し侍る 中村 義堯

言の葉のしけれ宿にかきりなきちよのよはひをまつ下陰

国安 通清

行すゑのかきりしられす和田の原やそしまかけて寄るとし浪

佐伯貞中雅翁八十賀詠三十首

松迎春新 吉田 惟義

恵みある春をまちえて言のはのいろまさりける和歌のうら松

鶯是万春友 丹原 有政

長閑なる声をも友とよろつ代のはるになくさむそのうくひす

沢若菜 石田 茂与女

あしひきの山田の沢にをとめ子かむれて若なをつむそのとけき

花慰老 広江 竜暉

はなゆへに老らくの身も忘られてあかすなくさむ春やいくはる

野糸遊 周布 里久女

思ふとち野へにころのひかれきてのとかにあそふ春のいとゆふ

首夏新樹 吉田 慶女

なつきぬと木々も緑りに茂りあひて青葉吹こす風のすしき

曳菖蒲 周布 祐女

ひく袖に池のあやめのをきそふる露もさつきの玉やかくらん

雨後夏月 周布 里女

ゆふたちは晴れて艸葉の露の上に涼しくすめる夏の月かけ

夏艸滋 全 きん女

すしさにたれも分みんはなはまた咲ぬなつの露の草むら

松下晚涼 吉田 まさ女

こぬ秋の風をまたはや茂りあふこの松かけに夕すゝみして

荻告糶

広江 通礼

置そふる露もみたれて秋を今朝つくる軒はの荻の上かせ

白露如珠

吉田 義弼

朝もよひ岸ねの苔のさむしろにたましきわたす秋のしら露

山月初昇

全 之中

さはるへき雲ははらひて山の名の嵐にのほる月のさやけさ

田上雁

周布 むら女

小山田の稲は吹しく秋かせにつはさや寒み落る雁かね

菊久馥

全 猶女

いく千本なを咲そひてませの内に久しくにほふしらくの花

閑居時雨

周布 宗豊

山かせの誘ふしくれをさよ涼みきくも静けき木かくれの庵

寒夜水鳥

全 岩女

さよ更て霜やをくらん水とりの払ふ羽音を聞もさむけき

雪逐日深

全 豊恭

行かよふ人の跡さへみえさりきひかすふりぬる野への白雪

月前神楽

吉田 貞福

神葉に霜のしらゆふかけそへて月にふけ行ふる竹の声

庭早梅

北条 すか女

としのうちに今朝咲初て庭面の一木のむめも春や待らん

寄衣恋

周布 家女

人よしれあふをまとをのあま衣うらみかさぬる中の思ひは

ゝ糸ゝ

全 豊女

うちとけぬ人の心はしらいとのいかなるふしのむすほふるらん

ゝ書ゝ

吉田 満寿女

かはらしとかき贈りこし玉章をみるに思ひそ猶まさりぬる

寄琴恋

周布 より女

松風にしらへかよひてあふことのすゑのを長く契てもかな

ゝ榊ゝ

北条 湛空

あふことのかはらぬ中を神垣のたまくしの葉にかけて祈らん

名所浦

周布 ゑつ女

玉くしけ二見のうらをみわたせはのとかに霞む春の朝和

池水久澄

広江 通辰

千年経て汀にあそふ鶴たにもしらてすみぬる宿の池水

岩頭苔

広江 通本

松杉の色たにしるし苔むしろいはほに生る千世のみとりは

竹不改色

北条 孝房

おひ添て行末<sup>つぎ</sup>遠くさかふらし色もかはらぬ庭のくれ竹

鶴伴仙齡

吉田 義利

幾ちよもともに重ねん仙人のすむてふ洞の鶴の毛衣

冬の比八十の賀を祝し侍りて

たのもしな老の浪よる八十嶋に猶も八千世と千鳥なく声

寄松祝

直政

ちりうせぬ松に契りて老らくのなをいく千とせよはひへぬらん

寄竹祝

順徐 律女

すなをなる宿にも契れ呉竹の千世に幾よの遠き行末

賀 詠

敏樹

八十よりかそへそむらしやをかはまのまさこにたくふよはひを

祝 言

この女

たのもしな老せぬ門のまつ風も外面の田鶴も千代よはふ声

寄松祝

春ことにみとりを添て老らくのちきり久しき庭の松かえ

貞中老人の八十の賀に

八十よりいろかかさねて花もみちいくはる秋か袖にかさむ

松有佳色

さかへ行その枝ことにいろ添てみるも久しき千世の松かえ

千とせ経ん玉松かえのいろも猶はるにひかりをそふる此宿

常磐なる色にさかえを先みせてちよの声そふ軒の松風

さかへ行庭におひそふ松かえに契るよはひや久しかるらん

す多遠く君やみるらし春毎にみとり色そふ庭の松か枝

寄鶴祝

たのもしな八十のちも幾千代の齡ともなふわかのうちつる

龜

かめ山のいはねのまつに契り置て千代よろつよといわふことふき

松

幾千代のかきりはあらし此宿のみきりの松によはひ契りて

竹

ふしことに千年をこめて呉竹のみとり色そふ宿のことふき

高節千尋不可褻 清風一洗人間熱

古来今往此君心 徹尾徹頭清与節

賦竹

興詠

御達者やなをく千代をかけたにたしくあたるやそし成へし  
泰平のすかためてたや老ひとのこしにも弓をはらぬやそしは

政寿

八十の年数よまんせつふんのみまな翁の身を祝ひうた

重任

よろこひに鶴やかめやは古くさい今のすかたて千代も八千代も

分明

とこまでも杖をはなしていく玉の彦八十や尽ぬことふき

惟撫

百年も千年の外も佐伯氏みの健かは今か貞中

榎女

前書有この所に 略す

芳信

折すしてよにしる花や宿の梅

頼女

行渡るあらしは梅の操かな

宗豊

松下雅翁の八十を賀して

充豊

春の日のそれには若し松の友

彩牛庵雨律逸翁はむかし諧哥の交せし人なり

春に逢ひて祝のころを申贈る

千々の春和哥のうら浪旅日記

齒固や月はなの味替りなく

八十翁の墨跡を得て

吹まゝに縫れないとの柳かな

八千年の数とりそめよたま椿

齒固や月はなの味替りなく

八十翁の墨跡を得て

吹まゝに縫れないとの柳かな

八千年の数とりそめよたま椿

今治 具外

壬生川 音春

周布 一調

ちからの 有武

雨桂

雨貢

壬生川 いそ春

新居中邑 風平

北条 東岳

石田 蘇笈

松山紅葉庵 杉堤

義利

義弼

馬来

全

松風の声もろともに和らきて千代やしらへん老のつま琴

寄松祝

義弼

義利

馬来

全

松風の声もろともに和らきて千代やしらへん老のつま琴

寄松祝

義弼

義利

馬来

全

松風の声もろともに和らきて千代やしらへん老のつま琴

寄松祝

義弼



契りをく千代のためしはよつの時もはかへぬ松の色にみへけり

八十賀

安政

玉椿かはらぬ色にちきりてややそしの老の八千代へぬらん

寄松祝

美文

ことのはのこゝろのはへてやとの松老せぬ千代の栄へまたなん

寄竹祝

辻女

朝な夕なあふきつゝみん幾千世もちきり久しき宿のくれ竹

諸君やつかれをことふきし給ひて数章の金玉を恵み給ひければ

貞中

ことの葉のめくみの露の嬉しさに老木の松も猶千代やへん

日はめくり水はなかれて万代ののちも絶せぬ天地の道

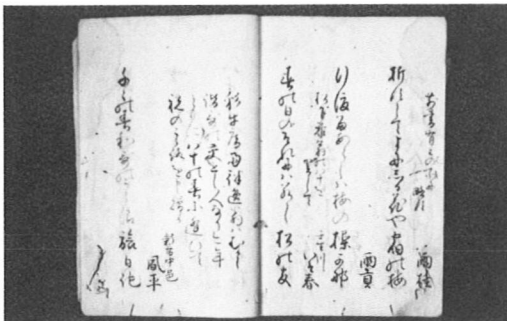
山月翁のことし八十にみち給ふよしきゝて

吐屑庵 慈延

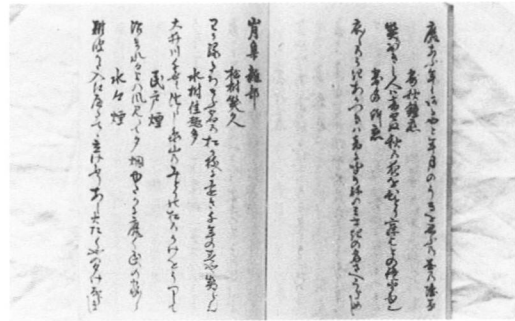
言の葉の本すゑさへにあつさ弓やそしの老の物つよく見ゆ

(昭和六十年十月十一日 受理)

佐伯貞中の和歌



周桑歌人集



山月集